

シリーズ ウイズコロナ

大学院生として
コロナ禍に思うこと

北海道大学病院 内科 I
佐藤 峰嘉

私は呼吸器内科医をしておりますが、現在は博士課程の大学院生として基礎研究を行う研究室に学内留学しています。週の大半を研究室で生活しており、最近では呼吸器内科医としての仕事はそれほど多くはありません。今回はそのような立場の私がこのコロナ禍で経験したこと、感じたことなどを書きたいと思います。

昨年SARS-CoV-2が世に広まり、感染が拡大していく中で、大学としての行動指針である事業継続計画 (Business Continuity Plan) が発表されました。4月20日からは活動の制限のレベルが引き上げられたことで、新規の実験を開始することが難しい状況が1ヵ月以上続きました。私のいる研究室は主に細胞や小動物等の「生き物」を用いた実験を行っていますので、例えばカルテなどからの臨床データを解析するような研究とは異なり、できることがかなり限られてしまうことになり、少なからず研究活動に遅れが生じてしまいました。いろいろな研究室でさまざまな研究が行われていますが、その性質によって、このような事態でも影響を受けやすいものとそうでないものがあることを身をもって実感しました。また、大学全体としての対応の指針は示されますが、それをどのように個々の研究室の事情に合わせて実行していくか、研究室内での感染が起らないようにするか、前例のない事態に研究室のスタッフの先生方のご心労は大変なものであったのではないかと思います。現在も研究室の定期的なミーティングをオンラインで行う等、大勢で集まることのないように注意がされています。また、臨床現場でのPPEやPCRを用いる機会が増えたためかと思いますが、実験室で用いる手袋やPCR関連の物品なども品薄になっているようです。人命のため臨床現場での使用が優先されるということは言



2012年北海道大学卒。一般内科や呼吸器内科研修後、現在は北海道大学大学院在籍中。研究はまだ勉強が足りず分からないことが多いですが、臨床との繋がりを考えることが楽しいと思っています。

わずもがなです。

昨年、学会発表の機会もいただきましたが、こちらでも臨床系の各学会と同様にWEB開催の形式をとったものが多くなったようです。学会会場まで行くのにかかる時間や金銭的な負担がなく、オンデマンド配信される発表の動画を実験の合間等に比較的気軽に視聴することもできるという良い面がある一方で、意識的に見ようとしないと結局見ずに終わってしまったり、他の研究室の方に質問したりすることが直接会うことができないため難しいという良くない面もありました。

さて、現在私の在籍する研究室には海外から日本に来ていた博士研究員や留学生がいます。遠く離れた母国の家族や親類、友人の無事を祈ったり、いつになったら帰ることができるのだろうかと思えない状態に悩んだりしている様子も見受けられました。本当に大変なことだと思いますし、どんなに心配なことであろうかと思えます。また、彼らには感染の状況等いろいろな情報が言語の問題等で届きにくいこともあるようです。このような非常事態において、弱い立場に置かれてしまう人たちが身近にいることも認識されました。

今、私としては大学院生として自分にできる研究をきちんと行い、成果を出すということが優先されるのですが、COVID-19に関連が強い診療科の医師として、より貢献できることがあるのではないかといい想いもあり、これで良いのかともややもやすることもあります。状況がこれ以上悪くならないことを切に祈りますが、いざという時に力になれるように臨床の情報も適宜updateすることを心がけていきたいと思っています。